第1257号　【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】　みいけ　（毎月2回1日16日）　1985年9月1日（日）(二)

緊急インタビュー

墜落事故の背景をさぐる

簡素化された整備

営利優先で安全守れるか

大惨事となった日航機墜落事故。原因究明が進むにつれ、安全性よりも利益を優先させる企業の姿勢が見えてきましたが、日航労組の若月委員長に聞いてみました。

×　×

他社の整備受注で収益拡大

一九八三年に日本航空は会社全体を二万人体制とする合理化方針を打ち出した。その結果、当時二万二千人いた従業員の内、千人がこれまでに減らされた。

この合理化方針によって整備職場でも百人が削られ、いまでもさらに百十五人減らす計画が進められている。一方、人はどんどん減らされている中で、ジャンボ機の導入などによって整備量は増えてくる。しかも、ジャンボが老朽化してくることによって、さらに整備は増加しているのです。

しかも会社は、この上に整備で金を儲けようとアメリカや東南アジアの航空会社の整備受注を行うようになった。とにかく、利益をあげるために会社全体を合理化する。整備も簡素化し、労働者をこき使い、さらに余剰を作り他社の受注を行うという営利優先がまかり通っているわけです。

墜落した一二三便は福岡から羽田につき、五十分後に出発した。この間に行われる整備をT整備というが、正直いって整備というより点検で特別な整備はキャプテンから指摘されない限り行わない。今回の事故の要因とされるようなものを発見することは不可能なことなのです。

墜落したボーイング747SRの同型機

オーバーホールはいらないのか

そこで問題なのは定期的に行われる重整備です。ジャンボジェット機は大量に人を運び、しかも整備は簡素を売り物に十五年前に就航した。もともと経済性を重視した飛行機なのです。これを整備の面で見ると、それまでのDC10はA・B・Cの整備に加えてDといわれるオーバーホールの工程があった。しかし、ジャンボはA・B・Cの他にH、つまりホスピタル一人間ドックに入れるような工程しかない。Cでできなかった作業に加えて塗装のし直しなどを四年に一回行う、オーバーホールなどの重整備はいらないというわけです。

それが機体が新しいうちは、それほど問題にならなかった。しかし、機体が老朽化し重要な構造もいたみはじめているのです。老朽機とは飛行回数が一万回以上のものをさすが、事故機は一万八千から九千回飛んでいるのです。日航のジャンボの半数が、この老朽機に入るのです。組合はこのような事態を重視して、ジャンボにもD整備を行うよう主張していたのです。

一方、このような安全よりも利益優先の体制は整備現場だけでなく他の職場でも行われている。社の方針は航空燃料の節約を重視しているのですが、先日も天候不良のために他社の飛行機が降りないのに日航だけが着陸したことがあった。安全よりも燃料節約がパイロットに負わされている。これでは乗客も乗員もたまったものではないのです。

ここにも臨調・行革の影が

一ばん最初に述べた二万人体制。実はこの方針は日航の経営改善をはかる臨調・行革の路線によって示されたものです。昨年にも総務庁から日航により効率を高めるという報告が出された。一方で社の方針に従わない労働者をしめつけるために、露骨な組合分裂工作を行う―こういう政府や会社の姿勢が、今回の事故の大きな背景としてあるのです。（労働ニュース）

大会宣言

きわめて重大な時期に本総会は開かれた。

われわれは、生活と権利、命と平和を守るための諸活動に取り組んできたが、とりまく情勢はいちだんときびしさを増し、緊迫している。

連続して起こった大災害は、石炭資本と政府の責任を明らかにするとともに、あらためて保安確立のたたかいの重要性を提起している。なによりもまず、命を守るたたかいに全力をあげよう。

破たんした第七次石炭政策にかわる第八次政策への諮問が行われるが、災害発生と関連して二千万トン体制をかなぐり捨て、わが国の石炭産業をますます衰退の方向に導くものになることは必至の状況である。これ以上、炭鉱労働者に犠牲を強要することを断じて許さず、抜本的な石炭政策を実現しよう。

三池炭鉱はもとより、全国の炭鉱において減量合理化の推進に拍車がかかるとともに、労働者は過酷な労働条件のもとにおかれ、切実な願望をもってたたかわれた春闘はじめ四大闘争の結果は、他産業との格差が広がり、耐え難いものとなっている。当面する秋闘、さらに年間臨給制度となる冬の期末闘争、八六春闘において、「人並み」から「地下労働者にふさわしい」労働条件の向上を目ざそう。

三川鉱大災害から二十二年、裁判提訴から十二年。長い苦しいCO闘争も法廷でのたたかいが最終盤にさしかかっている。全体的な立場で確実な勝利を実現するために全力をあげよう。

労働運動の現状と、労働戦線統一をめぐる動きは、右翼的再編のなかで重要な段階を迎えている。たたかう労働運動の再生と発展を目ざそう。

戦後最悪の中曽根自民党内閣が進める反動諸政策のもとで、社会保障・福祉の切り捨て、大増税、臨調路線による教育の破壊、国鉄の民営・分割、さらに国家機密法の制定、軍拡、戦争への道を許さず、「戦後政治の総決算」と対決し、国民諸階層と深く連帯してたたかおう。

戦後四十年、三池闘争から二十五年の節目に立って、いっそう統一と団結を強め、一人ひとりの力を結集して奮闘することを決意し、ここに宣言する。

一九八五年八月二十五日
三池炭鉱労働組合
定期総会

スローガン

一、長期抵抗統一路線を基調に、職場と地域闘争を強化し、三池炭鉱全労働者の統一闘争の前進をかちとろう。

一、炭鉱労働者の生命と権利を守り、石炭産業の発展と、労働条件向上をめざす第八次石炭政策闘争を推進しよう。

一、CO遺族闘争を推進し、労災・職業病のたたかいと連帯し、CO裁判闘争勝利のために奮闘しよう。

一、自民党・財界の国民を犠牲にする行政改革・軍拡路線と対決し、八六春闘と諸闘争を勝利しよう。

一、たたかう労働運動再生のために、労働戦線の右翼的再編に反対して頑張ろう。

あれから二十五年 (5)

青空保育園

岡浦益美

一九六〇年六月二十三日(木)晴。

ロック・アウト百五十一日目

三池労組青空保育園が開設され、利江（二女）喜び勇んで登園。緑ケ丘保育園横の広場にテントが張られ、緑ケ丘社宅の三川関係約八十人の子弟が、第一組合の保母さん十二人と一緒に、午前九時から十一時まで楽しく過ごした。大阪、東京からスト支援にきておられた保母さんも協力。今日から毎日、各地域を巡り、その成果によって期間や保育内容を検討し、充実させる由。

当日の日記には、岸首相引退表明。新安保けさ十時発効。大地評組合員バス三台で各社宅を激励訪問。第二組合員「治安維持に積極性欠く」と警察署前に座り込み。第二組合員五千三百二十五人に達したと発表。嘉穂相田鉱で炭酸ガスが噴出し、作業中の四人窒息死。その他のメモの中で、何よりも最優先してトップに青空保育園のことを書いている。

その日の二女の喜びようはひとしおではなかった。二女にとっては待ちに待った最良の日であったに違いない。

二女は、その年の四月から、兄ちゃんや姉ちゃんが通った緑ケ丘保育園に入園し、楽しい毎日を送るはずであった。

ところが、組合分裂いらい各社宅の保育園は、非情にも会社の手で閉鎖され、なお、その上に幼児にとって唯一の殿堂を警官隊の宿舎にしてしまった。

もうすぐ入園できる嬉しさを顔いっぱいに表わし、揃えてもらった服や靴を大事そうに撫でたり、寝るときはそれらを枕元に置き、朝起きると帽子を被り、カバンを肩に「行ってまいりまァす」と練習までしていた幼児の夢を、三井の経営者は無残にもぶちこわしてしまったのである。

屈強な警官が、自分が通園するはずの保育園を肩をいからして闊歩し、わがもの顔に往来する装甲車で運動場が踏み荒されるのを、この児たちはどんな気持ちでみつめていたことだろう。運動場に幾重にも刻まれた轍（わだち）を見せつけられては、「ケイカンカエレ」と叫びたくもなるであろう。

子供を守り、たたかいを前進させるための一環として、組合と主婦会が乗り出し、緑ケ丘社宅を皮切りに青空保育園が開設され、わずかな期間ではあったが、テントの中で保母さんのお話を聞き、また遊戯に時を忘れて、それなりの幼児時代を過ごしはしたものの、何の罪もなく、まだものごとの理解もできない幼児に対して、三井資本は残酷な仕打ちを何のためらいもなく強行したのである。

あれから二十五年。わくわくして待っていた保育園入園の夢をつぶされた二女も、今は三十歳。五歳と一歳半の男の子二人の母親となり育児に追われている。

×　×

岡浦さんは昭和二年六月十八日生まれで五十八歳。昭和二十一年万田鉱に入社。二十六年合併で三川鉱へ。三池闘争前は坑内機械工で闘争後の配転で採鉱重要工事部内（のちに開発部内となる）の仕繰工として働く。職場委員一期、地域の役員、さらに三川鉱爆発後CO担当の臨時執行委員をつとめ、五十七年定年退職。お住まいは荒尾市中一部四一七。

三池闘争弾圧のために派遣された警察官、機動隊は子供たちの保育園を奪い宿舎とした。こうして母も子も、資本と権力の結びつきをいやおうなしに知った。